

★ 臺灣紀行 ★

山 本 一 清

臺灣に於ける學會に出席のため、又、南天研究の希望で臨時に一出張所開設の目的を以つて、去る年末の數週間を費すべく、京都を出發したのは十二月12日であつた。自分として、臺灣へは1927年十一月と、1928年末と、既に二回行つたことがあるので、こんどが第三回目である。

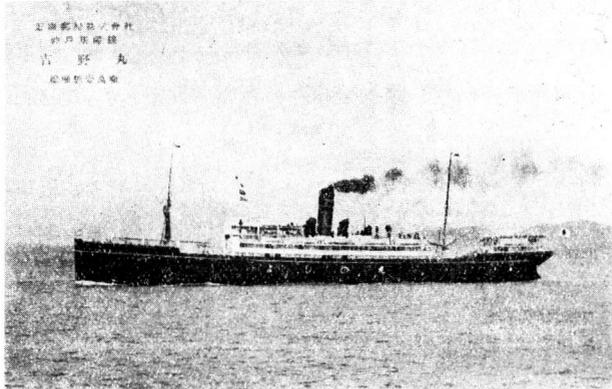
1934年十二月12日(水曜) 午前中、花山で研究室の整理、留守中の用事など依頼し、午後下山、豫定の如く19時55分京都驛發の急行車に乗る。すぐ寢臺に入り、熟睡。

十二月13日(木曜) 6時半、車中、ボイに起され、下車の準備。7時に下關驛着。廣津支部長に迎えられ、山陽ホテルで少憩。8時半から梅光女學院へ行き、校外外を散歩、港内遠近の景色を見る。樽見氏に毎日日没時の綠閃光の觀測をすゝめた。9時から全校生徒に一場の講演。それから廣津氏に送られつゝ、まづ門司に渡り、鶴原氏を訪ね、10時半に近海郵船「吉野丸」に乗船、正午出帆した。熊田氏と同室である。

海上、風波絶無、立海灘も、まるで瀬戸内海を行くやうに静かで、全く之は始めての經驗であつた。天氣甚だ晴朗。17時20分、田中館氏と共に船橋の操舵室を訪問中、エボン島の燈臺の邊で、海中に沈む日没を見たが、まことに美しい典型的な綠閃光を双眼鏡で見、ひとり喜んだ。辰氣樓のためか、水平より一分角ばかり上方で一抔の鮮綠色帯が残り、約3秒時間見えた——此の如き見事な現象は今まで未経験のことであつた。

23時半頃よりボート甲板に上り、獨り天空を見る。恰も今夜は双子座流星群の最盛期で、一時間に約100の流星を見た。殊に0時44分にはオリオン座からエリダヌ座へ飛ぶ大火球を見た。光芒の長さ約30°、光輝は青白の-4等で、一旦消えて、再び赤褐色の-6に燃え上つた。時間は約^s2.5、可なり急速であ

つた。あとで船長室に行き、此の時の船の位置は東徑 $128^{\circ}15'$ 、北緯 $32^{\circ}49'$ であることを知つた。



「吉野丸」

この夜、ミラ星も大變明るく、ほゞ3.3と觀測。又、オリオン座ア星が非常に減光し、確かに「牛」のア星より淡く、ほゞ「双子」のβと同じく、光度は1.2

と目測した。

十二月14日(金曜) 船はやはりおだやかな海を南下中、今日は終日サルーンで計算。先日の草津で行つた経緯度は、概算を終つた。

正午の船の位置、東徑 $126^{\circ}02'$ 、北緯 $30^{\circ}32'$ 。もはやカノプス星も夜中に高く見える。但し、日没は低い雲の中で、緑閃光はかすかであつた。ミラやペテルギウスは昨夜の通り、しかし、双子座流星は既に著しく減少してゐた。

臺北の速水和彦君よりの歓迎の無電來る。

十二月15日(土曜) 朝、アジニコト島が視界に入り、いよいよ臺灣も近くなつた。しかし船は門司出帆以來、時刻が多少おくれれてゐるので、入港も豫定通りではないらしい。とにかく正午前から、船室内の片づけ、荷物の整理などする。

15時30分、基隆入港。學術協會の委員たちや舊友たちに迎えられ、自分は速水君の斡旋で、さきに發送しておいた25面反射鏡の都合を運送店にきいて見たが、未だ「瑞穂丸」の下積みになつてゐるので、臺中への積み出しは明日になるらしいとのこと。従つて豫定を少々變更、今日は臺北の宿に泊ると決定。16時の臨時列車に乗る。

17時、旅館「朝陽號」に着いて、速水、荒勝、近藤、原諸君の來訪を受けた。

臺中へ明日到着の旨、電報。

十二月16日(日曜) 午前中、錦町43に舊師吉川先生を訪ねたが、あいにく御不在だったので、宿へ引き返し、少々買物などした後、荷物の整理。

15時41分、臺北驛發車。同車した大橋牧師(聖公會)に、いろいろ臺灣事情をきく。20時44分、臺中到着。松本、速水弟諸君に驛頭で迎えられ、旅館「千代の家」に入る。

十二月17日(月曜) 朝9時、松本君と同道して臺中第二中學校へ行き、板垣校長に會ひ、望遠鏡据付けに關する厚意を謝し、荷物到着と共に、近々据付けにかゝる件其の他を打ち合はせ、11時一旦歸宿。——11時37分、可なり遠距離かららしい地震を感じた。

14時、松本氏に案内されて高等女學校へ行き、岡崎校長に會つて、松本氏の觀測事業や、二中校庭借用の件等に關する厚意を謝した。其のうちに、望遠鏡が無事に二中へ到着した由の通知があつたので、早速出かけて行き、學校の職員たちに助けられつゝ、總計八個の荷物を解いた。すべて異状は無い模様である。

夕食後、19時より約2時間、臺中市教育會の主催による天文講演會が圖書館で開かれ、出講。今日は天球の概念から力學論をやつたが、其の最中、圖らずもヘルクス座新星發見の電報が京都から届いて、興を深くした。誠に十年ぶりで、珍らしいニュースである。位置から言ふと、此の星は夕暮れと、早曉と、日に二度見えるらしい。

講演終了後、松本氏と二中校庭へ行き、望遠鏡の臺の方角を檢查したが、校舎が少々西にふれてゐるに拘らず、臺は殆んど正しい子午線を向いてゐて、安心した。

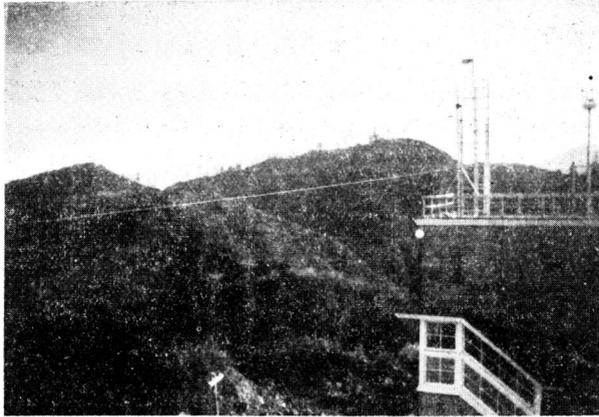
十二月18日(火曜)

朝6時少し前、宿の樓上から東北の低空を双眼鏡で搜索し、織女と龍座が星との中間に果して明るい新星を見つけた。光度は $2\frac{1}{2}$ 級ぐらゐか？ 色は青白だから、尙ほ上昇するものと思はれる。

9時頃から二中へ行き、松本氏と、博物館の藤森氏と、三人で望遠鏡の据え付けに着手する。佐官一人と人夫二人は下敷きの鐵板を 11° の傾斜面に固定し

た。——意外に速く、据え付け作業は進み、17時半には一應終了。但し adjustment だけは明日にゆづる。

阿里山
の高山
観測所



向ひの
最高部は
「祝山」

19時から21時半まで、昨日の続きの天文講演を市の図書館でやつた。今日は満員以上であつた。内容は新宇宙論まで。

今夕の観測により、松本氏は新星の光度が2.0に近いと言つてゐられる。

十二月19日(水曜) 早朝、ヘルクレスの新星を見た。光度は「龍」の γ と β との中間で、ほぼ2.6等ぐらい。今日は午前中、松本氏が忙がしいので、自分も宿で休養。11時頃から測候所を訪ねた。所長は数年前に臺北測候所でタイム観測係であつた石川氏で、舊知であるところから、ゆつくり話し込んだ。臺中の天氣の事、阿里山の事など、いろいろ聞く。

午後は14時から松本氏と二中へ行き、望遠鏡の自動装置の手入れと調節とで、手は油だらけ。18時に歸宿。——夜は、所持の雙眼鏡の解剖と修理とを、蚊帳の中でやつた。プリズムの塵が全く取れた。

“新原稿募集”

『文藝欄』、『質疑欄』が新設されます。

(精細は本文第169頁を参照)